



Vol.2

大久保武さん（檜原村）

「ドーモ、ドーモお世話になっておりますっ！！」

受話器の向こうからやたらと威勢のいい声が聞こえてくる。元気ですかと聞くまでもない。

「炭焼きの話聞きに行きたいんですがっ！」

こちらも負けずに声を張り上げる。

「ハイッ！お待ちもーし上げておりますっ！！」



大正 12 年生まれ、大久保武さん 83 才、言葉使いの丁寧な炭焼名人である。

見渡す山は色とりどりの広葉樹が広がっており、山の麓にはあちらこちらで白い煙がぼうぼうと上っていた。浅間尾根の街道（甲州街道の中道とも呼ばれていた）には馬や牛の背に炭俵をくくりつけ、子供を背中に背負った女衆が五日市を目指して通っていたような。戦後直後

の檜原村の様子である。

大久保さんが炭焼を始めたのは尋常小学校を卒業後の 12 才、親の手伝いから始まり、夜学に通いながら働き、16 才からは独立して自分の窯を持つようになった。

「炭焼っていうのは学問はいりませんが、馬鹿じゃ出来ません！窯も生き物、クセがあるし、火入れと窯口のふさぎ方なんかもある。木の太さをそろえるのが一番大事なんですよ。商売にしようと思ったら、10 年はかかりますねえ。」

戦後の昭和 20 年から 25 年にかけては、炭の需要が高まり、焼いても焼いても間に合わなかったという。「この頃は、炭焼く人間にとっちゃ一番いい頃だったなあ…。良い山に当たったときは何もかもうまくいって、窯まで炭を買いに来る人がいて、窯の周りに金やらコメやら置いていきましてねえ。ここいらじゃ、その当時は盆と正月ぐらいしか米なんて食えなかったのにね。一年で 500 俵以上出せば、国から報奨金も出だし、1000 俵焼けば、国



から国会議事堂まで招待されて、車も用意してもらって行ったもんですよ。ほんと炭を焼くのがたのしくて、うれしくて、笑いが止まらなかったですよ！」

昭和 30 年頃を境に徐々に豆炭、炭団、練炭、石油、ガス、電気と燃料も代わってきたこともあり、60 才で大久保さんは商売としての炭焼を引退し、その後は都民の森で炭焼教室の指導者として、今でも老若男女問わず、炭焼の楽しさを伝えている。中には自宅の庭で炭焼を始めた人もいるそう。「木の葉はやがて元へ落ちるって言いましてね、いずれ化石燃料が無くなる頃には炭焼がまた見直されるかもしれませんねー」

30 数万年とも言われる木炭の歴史を有する我が国の技術が、軽量、火熱の永続、かつ腐朽を完全に防ぎ得るものとして評価され、今では世界中の砂漠地帯などで活躍しているそうです。揺らしてみれば意外と早く落ちてくるかもしれませんね。

大久保さん、取材協力ありがとうございました。